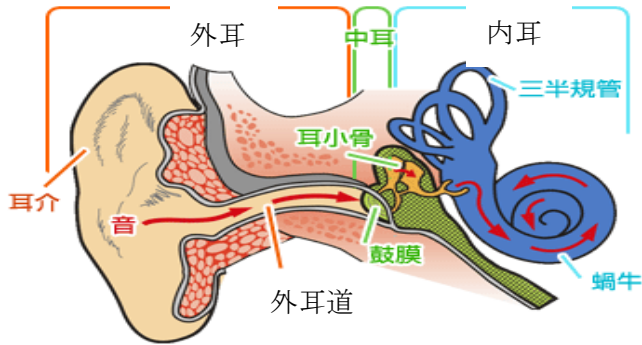


健康な人に比べて音、あるいは言葉が聞こえにくい状態を難聴といいます。難聴には先天性難聴、他の疾患が原因の難聴、薬物性難聴、原因がわからない突発性難聴と様々あります。そして難聴人口で一番多いのは加齢に伴って進行する老人性難聴です。先天性難聴、老人性難聴は注意しても回復しません。しかし、突発性難聴は適切な対応で治る可能性が高いので異常に気付いたら一刻も早く病院に行きましょう。

●耳の働きについて



耳は外界の音をとらえて脳に伝える働きをしている感覚器官です。外耳、中耳、内耳3つの部分から成っています。外耳から中耳に至る経路に障害があり、振動が十分伝わらない場合を伝音難聴、内耳から脳までの経路に障害があつて振動がうまく伝わらない場合を感音難聴といいます。

●突発性難聴とは

片側の耳の聞こえ方が急におかしくなる病気です。聞こえが悪くなるだけでなく、耳鳴りや耳閉感があったり、普段と違う聞こえ方をしたりすることもあります。眩暈を伴う場合は、脳の病気と関連することもあるため、聞こえ方の異常を伴う場合は注意が必要です。

突発性難聴は内耳に問題がある感音難聴の一つです。原因は、免疫力が低下しているときに内耳の感覚細胞にウイルスが感染し、細胞が障害される、もう一つは、何らかの原因で内耳の血流が悪くなり、機能低下を起こすと考えられています。誘因としてストレスや過労も指摘されています



●治療と今後について

突発性難聴発症後は完治する人、聴力が低下する人、重い難聴が残る人がそれぞれ 1/3 ずついるといわれています。発症時の症状の重い人、治療開始までの時期が長かった人は治りにくくなるようです。感覚細胞の障害は時がたつほど重くなり、やがて完全に壊れてしまいます。後遺症が残らない状態は 6~7 割、その他は耳鳴り、耳閉感、ふらつきなどの後遺症が残ります。この数値は発症から 1 週間以内に治療を始めた方の数値です。**発症後 1 週間が経過するとほとんどの症例で何らかの後遺症が残ってしまいます。治療は主に薬物療法で、1 週間以内、遅くても 2 週間以内には行うことが大切です。**主にステロイド薬の内服または点滴の治療です。ビタミン B12、循環改善薬、神経賦活薬などの併用があり、薬物療法以外では高圧酸素療法、混合ガス療法、星状神経ブロック、針治療などがあります。治療の効果は 1 週間ほどで現れ、この時点で改善していれば治る可能性は高く、改善していない場合はその状態で症状が固定することが多いといわれています。突発性難聴は急性疾患であり、早期に治療を開始することが完治への決め手となります。

●突発性難聴の再発について

突発性難聴は再発しないといわれています。もし再発した場合は、その他の病気であると考えられます。聴力が再び落ちるなど変動があったり、眩暈があったりする場合はメニエール病、聴神経腫瘍、あるいは外リンパ瘻、自己免疫による内耳障害など他の原因による疾患を考慮します。聞こえ方に異常を感じたら、症状が出てから 1 週間以内に当院スタッフにご相談ください。

❀お知らせ❀ 5月12日は休日当番医にて診療しております。